

おはようございます。ヨハネ 14:12 で、イエスは弟子たちに驚くべきことをおっしゃいます。「はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」イエスは、力をもって神の御国について教え、その教えの真実性を証明する多くの奇跡を行っておられました。そしてここで、イエスは弟子たちがその働きを続けるだけでなく、それ以上のことをなすと言われたのです。そんなことが可能でしょうか。イエスは、その後の一節でこのように説明されます。ヨハネ 14:16「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」ここで「弁護者」と言われているのは、聖霊です。

この数週間、弟子たちが聖霊によるバプテスマを受けた使徒言行録 2 章のできごとを学んできました。その日、弟子たちは聖霊に満たされ、彼らは言動のすべてが変えられました。そして、御霊の力によって歩み始めました。使徒言行録を続けて学んでいくと、弟子たちが御霊の力によって大胆にイエスを宣べ伝え、すばらしい奇跡を行うことがわかります。しかし、先に進む前に、聖霊のお働きについてもう少しともに学ぼうと思います。というわけで、使徒言行録の学びをいったん休み、今週は聖霊の賜物について、来週は聖霊の実について、学びたいと思います。

ペトロが群衆に向かって語った中で、そこで起きていることが預言の成就であると宣言した際、御霊の賜物について触れています。ペトロは、ヨエル 2:28 を引用して使徒 2:17 でこのように言っています。「神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。」神からいただいたメッセージを語る預言とは、預言的な夢や幻をとおして与えられたメッセージも含まれます。預言の賜物は、神が聖霊を注がれたときに、広範囲に広まるべきものでした。使徒言行録でそれが成就したことがわかりますが、同時に、神は預言以外の聖霊の賜物もたくさん与えてくださいました。では、他の賜物について見てみましょう。

御霊の賜物を挙げている聖書箇所は、コリント第一 12 章、ローマ 12 章、そしてエフェソ 4 章です。そこから抜粋して読んでいきましょう。

I. 聖書朗読 (新共同訳)

コリント第一12:7-11 12:7 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。 12:8 ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、 12:9 ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、 12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。 12:11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

コリント第一12:27-31 12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。 12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。 12:29 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。 12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。 12:31 あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。

ローマ12:6-8 12:6 わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、12:7 奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、12:8 勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

エフェソ4:11-12 4:11 そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教師、ある人を牧者、教師とされたのです。4:12 こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、

II. 教え

これらの聖書箇所、さまざまな霊的賜物が挙げられています。そして、何度も挙げられている賜物もあります。重複しているものを抜かすと、これらの箇所で次のような賜物が挙げられています。知恵の言葉、知識の言葉、信仰、いやし、奇跡、預言、霊を見分ける力、異言を語る力、異言を解釈する力、使徒、管理する者、援助する者、教師、勧め、施し、指導、慈善、そして、福音宣教です。

ずいぶん長いリストですが、これでもただの一例だと私は思います。人を驚かすようなとても目立つ賜物もありますが、あまり人の目に付かない賜物もあります。管理能力や勧めなどのように、生まれ持った能力だと思われるがちなものもあります。ここから浮かび上がるイメージは、聖霊が超自然的な霊の賜物を与えることもあれば、生まれつきの得意分野を生かした霊の賜物を与えることもあるということです。管理能力や指導力を持った人は、クリスチャンでなくてもたくさんいます。しかし、情報や任務を整理し、人々にモチベーションを与えるという点で目を見張るほど優れたクリスチャンのリーダーに何度か出会うことができました。その人たちは、単に才能がある人というだけでなく、その働きのために神から与えられた霊の賜物があつたにちがいありません。さて、ひとつひとつの賜物を挙げて、詳しく説明しようと思ったのですが、使徒言行録の学びの中で、これらの賜物の多くが用いられているのを見られるので、それぞれの賜物については今後の使徒の学びで取り上げたいと思います。

というわけで、今日みなさんにお話したいのは、これらの賜物のリストが挙げられた背景です。まず、**コリント第一12:11**を詳しく見てみましょう。「これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」賜物は、聖霊の望むままに、一人ひとりの信徒に与えられます。ここで、聖霊が人格の持ち主であることに注目してください。聖霊はどの賜物をいつ誰に与えるかを考慮して決められます。パウロは、賜物が同じ御霊によって与えられたことを強調しています。パウロはなぜそのことを強調しているのでしょうか。それは、ローマ帝国の主要文化であるギリシャとローマの文化は多神教的な考えで、コリントの多くの人々も、神や霊がたくさんいると信じて育ったであろうという背景からです。当時の現地の文化では、すべてのものにそれぞれ神や霊があると信じられていました。健康の霊、知恵の霊、金運をもたらす金の霊、などです。

そういう意味では、その人たちの考え方は、日本の神道の考え方に似ています。神道では、石や木、川や滝、すべてのものにそれぞれの霊や神が宿っていると考えます。神道の信者は、「やおよろずの神」という言葉を使います。「やおよろず」を漢字で書くと「八百万」ですから、それはたくさんの神がいる、数え切れないほどの神がいるということを指しています。ローマやギリシャ神話の考え方と、神道の考え方では大きな違いももちろんありますが、共通点もたくさんあります。特に、多くの神、多くの霊という点ではたいへん似ています。それで、パウロはコリント第一12章で、教会で見られるさまざまな御霊の賜物は「同じ唯一の“霊”」の働きであると力説したのです。パウロは、コリントの教会に手紙を書いているわけですから、読み手の大半はすでに唯一ま

ことの創造主なる神を信じる決心をした人たちでしたが、パウロは、人々が混乱して多神教的な考えに逆戻りしないように釘を刺したかったのでしょう。

実際、コリント第一12章のはじめの部分で、パウロは、三位一体の三格位にあらわされた唯一の神というクリスチャンの信仰について改めて語っています。コリント第一12:1-6を見てみましょう。「12:1 兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。 12:2 あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。 12:3 ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。 12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。 12:5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。 12:6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。」

パウロは、コリントの人々に霊の賜物について無知でいてほしくはありませんでした。とくに、異教的な考えや偶像礼拝に戻ってほしくないと思っていました。そこで彼は、まず主であるイエス・キリストへの信仰を強調します。そして、いろいろな種類の賜物はすべてひとつの聖霊から来ることを強調しました。その後、彼は並列を用いてこのように語ります。(コリント第一12:4-6)：

12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。

12:5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。

12:6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。

並列で述べられた3つのことで、パウロは、さまざまな種類の賜物、務め、働きがあってもそれはすべて同じ霊、同じ主、同じ神から来るのだと教えています。別の言い方をすれば、三位一体の唯一の神がこれらすべてのことをしておられるということです。パウロは、父、子、聖霊という三格位にある唯一の神という三位一体の神学を指示しつつも、神が唯一のお方であることを強く主張しています。

次に、コリント第一12:7で、パウロは賜物の目的について語ります。「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。」御霊の賜物が与えられるのは、全体の益のためです。教会全体を強め、建て上げるためです。その少し後で、教会はキリストの体であるとパウロは言っています。コリント第一12:12 「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。」

健全な強い体と言え、どんな体をイメージしますか。110mハードル走の金メダリスト劉翔選手の写真を見つけました。このような成果を挙げるには、綿密なトレーニングをし、全身がひとつとなって持てる力を最大限に発揮する必要があります。



教会はキリストの体であり、私たちの使命はイエスの良い知らせを地の果てまで携え、すべての人を弟子にすることです。聖霊は、その働きに私たちを備えるため、霊の賜物を与えてくださいます。しかし、皆がひとつになって働いてはじめて、私たちは役に立てるのです。コリントの教会に宛てたパウロの手紙は、体の中の効果的な協力、一致と調和が必要であることを強調しています。

コリント第一12:20-21を見てみましょう。「12:20 だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。 12:21 目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。」ここで私たちに語られていることは何でしょう。それはいたって簡単です。お互いが必要だということです。教会は、目的における一致と調和をもって働かなければ、主の働きを効果的にすることはできません。目的における一致と調和がなければ、

体はひとつも働きを達成することはできません。このことを説明するのに、とても簡単な例を挙げたいと思います。ちょっとばかげた例ですが、そのほうが思い出しやすいかもしれません。頭が、水をほしいと思います。目がコップに入った水を見ます。足がその場所まで体を運びます。そして、手が水の入ったコップを取り、口元へ持ってきます。こんなに簡単なことでさえ、体全身がいっしょに働かなければならないのです。



コリント第一12:27「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」ここOICは、いろいろな国からあらゆる賜物と才能を持った人たちが集まった多様性に富んだ場所です。しかし、皆さんも私とともに、完全な一致と調和を祈ってくださるようお願いします。そうして、神の栄光のために私たちがともに働くためです。



今日読んだ聖書箇所にかかれていたさまざまな霊の賜物は、いろいろな体の部分のようなものです。それぞれに各々の役割とあるべき場所があります。しかし、その賜物が効果的に用いられるためには、体全体との調和をもって用いられなくてはなりません。パウロはこのことをコリント第一14章で強調しました。そこでは、賜物のふさわしい用い方が述べられています。今日は、その結論としてパウロが述べたことをみなさんと分かち合うにとどめておきたいと思います。コリント第一14:39-40「14:39 わたしの兄弟たち、こういうわけですから、預言することを熱心に求めなさい。そして、異言を語ることを禁じてはなりません。14:40 しかし、すべてを適切に、秩序正しく行いなさい。」霊の賜物は良いものですし、それを求めることも良いことです。しかし、すべてのことは適切に、秩序正しく行われるべきです。それが体全体に益をもたらすからです。

先ほど言ったように、OICはあらゆる背景を持った人々が集まった多様性に富んだ場所です。ですから、ここで御霊の7つの賜物についても話しておきたいと思います。7つの賜物として通常挙げられるものは、知恵、悟性、分別、勇敢、知識、敬虔、畏怖です。これらの賜物は、今日の聖書箇所で見えた御霊の賜物とは違い、特定の人ではなくすべてのクリスチャンに与えられるといわれています。特に、ローマ・カトリック教会では、個人によってあらわれる度合いに違いがあるとは言え、すべての信者がこれらの7つの賜物を受けると教えています。



キリスト教の書店や、キリスト教書籍のカatalogで、この写真にある十字架のような飾りを見かけたことがあるかもしれません。これはその7つの賜物を基にしているのですが、その7つの霊の賜物のリストは、イザヤ 11:2-3 から来ています。この写真の飾りに刻まれた言葉は古い英語の聖書から取られていますが、私たちの読む聖書と同じ意味合いのことが書かれています。「11:2 その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、恐れ敬う霊。11:3 彼は主を恐れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず／耳にするとところによって弁護することはない。」この箇所は、メシアの来臨を預言するものですので、まず私たちの主イエス・キリストを指しています。しかし、すべてのクリスチャンはキリストに似た者とされるべきであるので、信仰の成長したクリスチャンの生き方をあらわすものとしてこの箇所を解釈しても行きすぎとは言えないでしょう。

III. 結び

12章にある霊の賜物のリストと14章にある賜物のふさわしい用い方についての注意事項の間に、パウロはコリント第一13章を記しました。これは、「愛の章」と呼ばれることもある有名な

箇所、結婚式でよく引用されます。この箇所は、霊の賜物について論じている最中に、突然話題が変わったように見えるかもしれません。しかし、パウロが霊の賜物について述べ始めたのが、教会における一致の必要性を強調するためだということを理解すれば、その真ん中に愛の章が入っているわけもわかるでしょう。それは、愛が一致と調和をもたらすからです。最後に、この美しい章から少し読んで終わりたいと思います。

13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。 **13:2** たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。 **13:3** 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。 **13:4** 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。 **13:5** 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。 **13:6** 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。 **13:7** すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

祈りましょう。

IV. 祈り

天の愛する父よ、
今日このように集まり、あなたの御名をたたえ、あなたのすばらしい御業に感謝する喜びと特権をありがとうございます。私たちのために備えてくださった救いをありがとうございます。この救いは、イエスの十字架とよみがえりにはっきりとあらわされたあなたの愛をとおして与えられています。イエスを主であり救い主として信じる者すべてに与えられるあなたの御霊を感謝します。どうかあなたの聖霊で私たちを満たしてください、私たちの心にああなたの愛を注いでください。日々、イエスとともに歩み、イエスに似た者へと変えられていくよう助けてください。あなたのおられる天国へと帰る日まで、そのように信仰の歩みを続けられるよう助けてください。教会家族に霊の賜物とすべての必要を与えてください。そして、私たちがひとつになってあなたの愛とあわれみの有効な証人となり、この時代、この場所で、イエス・キリストの良き知らせを分かち合うことができますように。親切で、あわれみ深く、寛容で柔和な人となり、あなたが愛してくださったように人を愛せるように私たちを導いてください。主よ、あなたの栄光のために、この場所に聖霊を注いでください。一人ひとりを祝福してください。そのご家族、ご友人、近所の人たちを祝福してください。そうして、人々があなたのあわれみとすばらしさを知ることが出来ますように。あなたがまことの生ける神であり、私たちのすべての祈りを聞いてくださることを感謝いたします。主よ、感謝します。イエスの御名によって祈ります。アーメン。